

俳雑

第14回

【岡崎清一郎の俳句】

八木 忠栄

詩のほかに俳句を作った詩人が少なくないことは、この連載でこれまでもふれてきた。岡崎清一郎はそのひとり。氏は足利市に住んでいて、他人に会わない人だった。むかし私が編集者時代、岡崎さんに詩を依頼すると、ハガキで「書きましようよ」と、一言だけ大きく書かれたお返事がきたものだ。そして締切日前には、ユーモアと綺想狂想がパワフルに混じりあう長い詩が届いた。

私は岡崎さんの詩が好きだったけれど、大好きな俳句もあるのだ。

木枯や煙突に枝はなかりけれ

という一句である。一読、ユーモラス。バカバカしい俳句と言われるかもしれない。

この句に出会ったとき、私のあいた口はさらにあいた。そしてうなった。作者が煙突を殊更に発見した驚き。孤高の詩人のたくましくも、ユーモラスな想像力躍如。木枯に耐えながら、のそつと突っ立っている煙突の無防備な存在感に、人間（自分）の姿そのものを重ねている。枝葉もなく、ただ突っ立ったまま手も足も出ない煙突。木枯を詠んだ句は古来多いけれど、この句は忘れがたい。